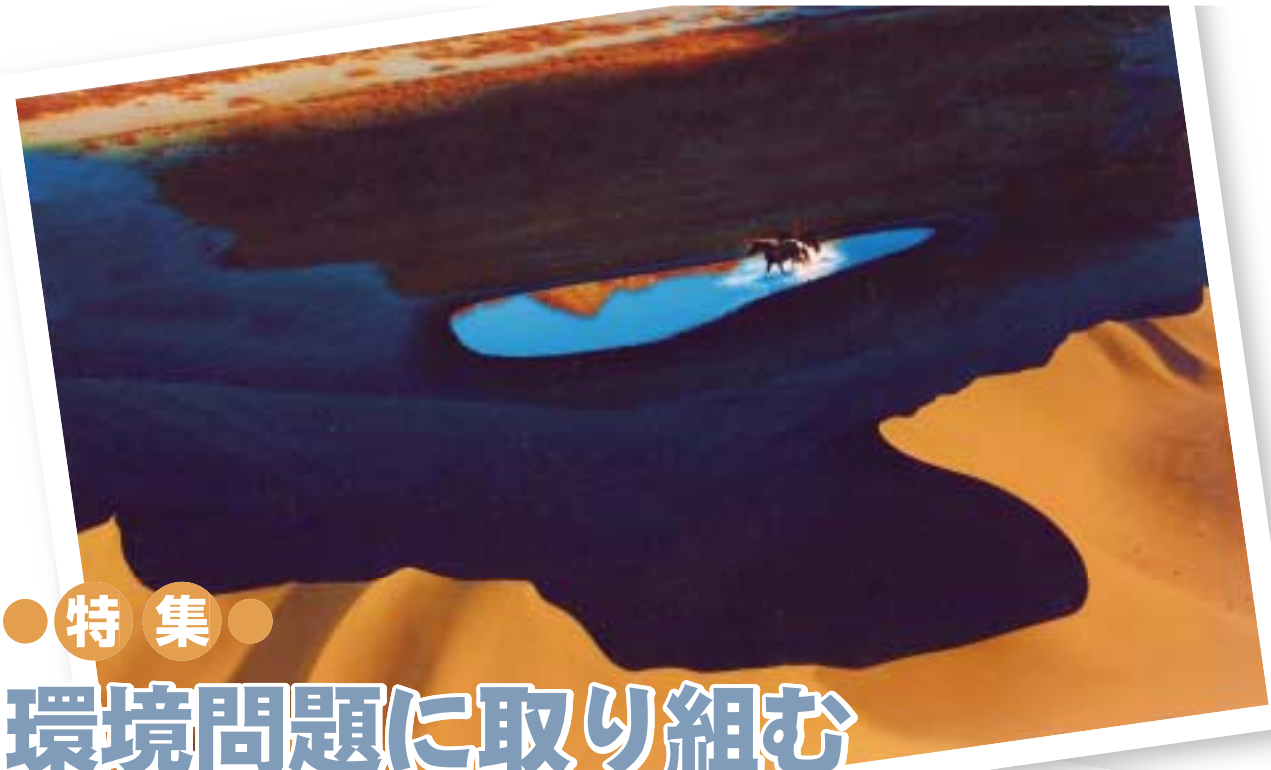
かながわ国際交流財団 Kanagawa International Foundation

Newsletter

かながわと世界をつなぐ

第4号 2007.11.



●特集●

環境問題に取り組む東アジアの市民ネットワーク

～インターネットがつなぐ草の根の活動 … 2

知をめぐる対話シリーズ（3） 坂東眞理子さん（昭和女子大学学長） …… 6
かながわのキーパーソン 新岡史浩さん（在日本ラオス協会会長、第5期外国籍県民かながわ会議委員） …… 9
投稿 矢崎英之さん
［KIF Report］ フォーラム「日本語学習支援の現状の課題」 …… 10
国連グローバルセミナー第23回湘南セッション他
［Event Schedule］ かながわ民際協力基金申請募集中（10/1～11/30） …… 11
かながわの国際化を考えるシンポジウム（11/16）他
かながわ民際協力基金2007年春助成決定事業、ゆめ観音 …… 12

写真上：Diamond-like Pond [Inner Mongolia, China] Hui Ju Yang / China ／ダイヤモンドのような池［中国/内蒙古］
写真下：How to Do Tomorrow [China] Yaohua Feng / China ／これからのやり方［中国］

特 集

環境問題に取り組む 東アジアの市民ネットワーク

～インターネットがつなぐ草の根の活動

地球温暖化などの環境問題は一国だけではなく、国境を越えて取り組まなければならない課題です。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）や京都議定書など、政府間や国際機関では各国が協力して取り組みを行っています。その一方で、レジ袋の削減や打ち水のキャンペーンなど身近なところから市民が取り組みを始めています。そして、発展途上国での植林や有機農業といった取り組みを行うなど、市民も国境を越えて行動しています。その中で、最近インターネットを使って、市民が国境を越えて協力する新たな取り組みがなされています。今回はその国境を越えた市民の新たな取り組みについて紹介します。

日中韓の3ヶ国の環境情報を3言語で発信・共有
―東アジア環境情報発伝所

言葉の壁を越える。それが活動の出発点にあった。環境問題に取り組む現場では、必ずしも英語が話せる人ばかりではない。「僕たちが本当に交流したり、協力し合ったりしたい相手は、草の根で活動している市民だった。そこから日中韓のそれぞれの国の普通の人たちもかかわっていけるように、3言語でホームページをつくることにしました」。東アジア環境情報発伝所代表の廣瀬稔也さんは語った。

「ENVIROASIA」は、日中韓のNGO（非政府組織）が協力して運営している、各国の環境情報を共有するホームページだ。それぞれの国で発信された環境情報をボランティアの通訳が各言語に翻訳し、3言語で掲載する。東アジア環境情報発伝所は、その市民ネットワークの日本側窓口である。

2001年に準備会合を重ね、2002年からホームページの正式運用を開始した。当初はそれぞれの理解が不足している部分もあり、国対国の立場から議論をすることが多かったが、年を重ねるごとに国を意識しない個人と個人の関係が徐々にできてきたという。「歴史認識や政治的な問題などの難しい面もあるが、環境の取り組みでつながることが、そのグラグラしそうな関係のつっかえ棒になれば」と廣瀬さんは言う。

その築き上げたネットワークを生かして、様々な分野の人をつなげる手助けもしている。例えば、より広く顔と顔の見えるネットワークをつくることを目的に、2年に1回「東アジア環境市民会議」を開催している。各国の環境NGOや市民を中心とした国際会議で、今までに日中韓で1回ずつ計3回開催された。また、個別の相談にも応じており、中国でレジ袋の削減の動きがあれば日本で活動している団体とつないで、情報共有をしてもらったり、自治体とNGOの日中韓の温暖化について考えるセミナーを行う団体に各国のスタッフを紹介したりと、触媒的な役割も担っている。

現在、中国の「癌（がん）の村（*1）」と呼ばれている水の汚染による健康被害と、日本や韓国などの先進国で排出される「イーウェイスト（E-waste）（*2）」が中国で分解・リサイクル

日本、中国、韓国。持続可能な東アジアへ

東アジア環境情報発伝所

〒102-0083
東京都千代田区麹町2-7-3　半蔵門ウッドフィールド2F
TEL：03-3263-9022
FAX：03-3263-9463
Email：info@eden-j.org

代表　**廣瀬稔也**（ひろせとしや）さん

大学時代からNGO「アースデイ日本・東京連絡所」にかかわり、環境問題に取り組む。大学4年生のときに、休学して地球を一周しようと各大陸を周った。2000年のアースデイのときに韓国、中国と環境協力の取り組みをはじめ、東アジア環境情報発伝所の設立にかかわる。

特　集　環境問題に取り組む東アジアの市民ネットワーク　～インターネットがつなぐ草の根の活動

第1回東アジア環境市民会議

第3回東アジア環境市民会議

言葉と国境の壁を越えて交流する

される過程で発生する環境汚染や健康被害の問題の2つに力を入れて取り組んでいる。2006年中国で東アジア環境市民会議が「水の汚染と健康」をテーマに開催され、日本の水俣病に取り組んできた人たちが参加するなど、日中韓で協力して具体的に活動していく取り組みについて議論を始めている。2008年の第4回は新潟で予定され、河川の汚染による水俣病の問題に取り組む市民団体と協力して開催することになっている。

歴史認識の相違や政治的関係で、何かと話題になる日中韓ではあるが、廣瀬さんは「当初は特に意識して国にこだわっていたわけではない。たまたま親しくなった相手が中国と韓国で、偶然の面が大きい」という。国という枠を超えて、人と人とのネットワークをつくることができればと考えている。

また、組織の論理にとらわれない柔軟性も団体の特徴だ。有給スタッフなし、全員ボランティアで、会員制度も採っていない。できる限りお金をかけずに活動を続けてきた。「組織としての形をとらなかったことが、もしかしたら今まで続いてきた理由のひとつかもしれません」。会員へのフィードバックや組織内の合意形成、活動資金の獲得など組織の維持に労力を費やされることなく、柔軟に活動を行えるのも利点のひとつという。

廣瀬さんの話を聞いていると、NGO活動での「人」の大きさを感じた。英語が話せる人や「特別な人」ばかりではなく、「普通の人」が環境問題を何とかしようと草の根で活動している。その人間の温かさに触れることが活動の原動力になる。

「日中韓でそれぞれのメンバーが個別に活動していても、年に1、2回直接会うだけでも元気になります。たまたま住んでいるところが違っても、（お互いに共通する）その地域の課題を何とかしていかなきゃと思っている人たちがいるということを知って、気持ちを新たにすることができるんです。中国の彼らが一緒だから、韓国の彼らが一緒だからやっていける、やっていこうと思えるという部分もすごくあります。損得勘定抜きに、思いの共感があったからこそ7年間も続いてきているのかなとも思います」と広瀬さんは語った。

*1　癌が原因による死亡率が極めて高い村。中国全土で20あるとも50あるとも言われ、工場からの排水などによる水の汚染が原因と言われている。
*2　Electronic and Electrical Wastes（電気電子機器廃棄物）の略。使用済みのテレビ、パソコン等の家電で、中古利用されずに分解・リサイクルまたは処分されるものを指す。その発生量及び輸出入量が増加しているといわれているが、鉛などの有害物質が含まれているため、不適正な処理に伴う環境及び健康に及ぼす悪影響が懸念されている。

韓国でのスタディツアー

西安市郊外で下水と化した河川の様子

特　集　**環境問題に取り組む東アジアの市民ネットワーク　～インターネットがつなぐ草の根の活動**

日中韓3言語環境情報発信サイト「ENVIROASIA」

http://www.enviroasia.info/

各国環境問題最新事情、市民団体・市民紹介、誰でもできる地球と生きる方法、環境情報リンク集など

『環境共同体としての日中韓』

寺西俊一監修　東アジア環境情報発伝所編、集英社新書、2006年

急速な経済発展を続ける東アジア。しかし、それにともない、深刻な環境破壊が大規模に進んでいる。大気汚染や酸性雨被害、土壌汚染、海洋汚染、砂漠化、森林破壊などが広域に広がり、漂着ごみや産業廃棄物、野菜の農薬汚染などの問題も顕在化している。かつての高度成長期に日本で起きた公害や環境破壊が、いまや日本を含む東アジア全域に広がっているのである。そして、地理的に近い日本・中国・韓国は、こうした環境破壊で密接に結びついている―。

本書は、地球環境問題の縮図とも言える東アジアの環境問題を、あらゆる角度から捉える。そして、ますます重要になりつつある、国家の枠を越えた、様々なネットワークによる環境保全の具体的な取り組みについても紹介してゆく。

かながわ環境写真展　作品募集中！

〆切12月7日（金）
［当日消印有効］

2008年2月1日から あーる ぷらざ で開催される「かながわ環境写真展」に向け、あなたが未来の地球に残したい環境「残したいもの」、残したくない環境「残したくないもの」、地球環境を守るためにあなたや地域が取り組んでいること「マイ・エコ実践」をテーマにした写真を募集します。入選作品は写真展で展示する予定です。詳しくはホームページをご覧下さい。

■問合せ：学習サービス課「かながわ環境写真展」担当　TEL：045-896-2899（祝日除く月曜休み）

表紙の写真は・・・

国連環境計画（UNEP＝ユネップ）が4年に一度開催する世界最大規模の「UNEP世界環境フォトコンテスト」に入賞した作品です。

このコンテストは主催：国連環境計画（UNEP）、協賛：キヤノン株式会社で行っており、日本での写真展開催には（特活）地球友の会が協力しています。

「ダイヤモンドのような池　中国／内蒙古」　2004―2005　一般部門の佳作
「これからのやり方　中国」　1999―2000　一般部門の佳作

※2008年2月1日（金）～3月16日（日）に開催する「かながわ環境写真展」にて「UNEP世界環境写真展 “Focus on Your World”」を同時開催します。
この写真も展示いたします。

特　集　環境問題に取り組む東アジアの市民ネットワーク　～インターネットがつなぐ草の根の活動

環境情報源

あつめる

環境の情報を掲載しているホームページで情報収集

EICネット

http://www.eic.or.jp/
環境情報案内・交流サイト
EICネットは、（財）環境情報普及センターが提供する環境教育・環境保全活動を促進するための環境情報・交流ネットワーク。環境情報ポータルサイトとして、環境ナビゲーションと環境コミュニケーションを2本柱としたサービスを提供している。

環境らしんばん

http://plaza.geic.or.jp/
環境イベントデータベース
地球環境パートナーシッププラザ（GEIC）により運営されている環境イベント・ボランティア・助成金・書籍などにについての検索データベース。登録した団体が自ら情報を書き込むことができるようになっている。

よ　む

環境問題について考える

『地球環境の教科書10講』

左巻健男、平山明彦、九里徳泰編著
東京書籍　2005年

地球環境問題の全体像をつかもう
　地球環境問題について概説的に解説した本。大学1、2年生対象のテキストとして、入門書として、中学校・高校などの環境教育の参考書として適している。
　参考図書や参考資料も豊富に記してあり、さらに深めて勉強するときにも便利。

『娘と話す　地球環境問題ってなに?』

池内了　現代企画室　2006年

地球のためにいまわたしたちができること
　私たちの暮らす地球が、危機にさらされている。「地球の気温が上がりつづけると、何がおきるの?」「環境が破壊されてきた、根本の原因ってなに?」問題なのはわかるけど、一体どうしたらいいかわからない。
　そんな娘の疑問に、科学者の父親が身の回りの実践をとおして答える。
　「娘／子どもたちと話す」好評ブックレットシリーズの第10冊。

『日中韓がいっしょに学ぶ環境《日本語版》（改訂版）』

日中韓共同編纂環境教育教本編集委員会
2005年

日中韓が協力して作成した教材集
　日中韓の小中学校教員、大学教員、環境活動家などが協力し、ワークショップを重ねながら作成したクイズや活動案が満載の教材集。日本語、中国語、韓国語の3言語版が作られている。第5章では、3ヶ国が共同で取り組める共同調査活動などを取り上げながら、「環境」と「国際交流・協力」をつなげ、子どもたちの関心が身近なところから世界に広がるように考えられている。あーる ぷらざ 2階の地球市民学習コーナーで閲覧できます。

知をめぐる対話シリーズ(3)

当財団の学術・文化交流事業に関わってくださった方々とのインタビューを紹介します。

ギア・チェンジで乗り切れ!
―育児と仕事の両立―

坂東眞理子さん(昭和女子大学学長)

昨年9月に出版されたご著書『女性の品格』がベストセラーとなり、今や女性の生き方についてのメッセージが幅広い層から支持を得ていらっしゃる坂東眞理子さん。当財団においても、11月中旬に開催する「かながわの国際化を考えるシンポジウム」*1、昨年度「21世紀かながわ円卓会議」*2等でご活躍をいただいています。今回は、国際交流のこと、仕事と育児の両立、そしてそれを支えた坂東さんの海外での経験や人生観についてうかがいました。

*1 「かながわの国際化を考えるシンポジウム」
神奈川開港・開国150周年メモリアルイベント、及びかながわ国際交流財団の発足を記念して、神奈川の国際化の取組みを概観し、これからの方向性を探るシンポジウム。坂東眞理子氏も基調講演者として参加予定(11月16日開催)。

*2 「21世紀かながわ円卓会議」
社会構造や政治経済システムの変容、価値の崩壊など国際社会の話題に着目し、研究者・有識者が一同に会して議論を展開する学際的な会議。前回は今年3月16、17日の2日間、「地球と地域の協働の道―社会関係資本を組み立てる」をテーマに開催されました。

「なんとかなるわ」の20代

坂東先生が仕事と育児を両立されてきた当時、まだ働く母親に対する育児休暇等の制度が十分整っていなかったと思いますが、どのように育児と仕事を両立されてきたのでしょう?

子どもが生まれてからも仕事を続けたのは、卒業当時就職難だったことです。今のように民間企業で女性を採用することはなく、公務員試験に運よく受かったとしても、採用してくれる省庁は少なかった。子どもが生まれたときにも、一度退職してしまったら、もう二度と採用してもらえないのではないかという危機感がありました。それが仕事を辞めずに続けた最大の理由です。20代のときのことでしたが、幸いなことに私も子どもも健康には恵まれていたので、その時々の状況に合わせて、「なんとかなるわ」という心構えで乗り切ってきました。不思議なもので「明日どうしよう」、「今週どうしよう」という状況を潜り抜けていくと、ある時点からふと「あの時もどうにかなったんだから、今回だって大丈夫。今辞めては、ここまで苦労したのが無駄になる」と楽観することもできるようになりました。

さまざまな制度が導入された今でさえ両立は容易なことではありません。大変な中でも続けてこられたのは、やはりこの仕事なら自分を発揮できるというような確信があったからでしょうか。

仕事に対する手ごたえを感じたのは、ちょうど総理府(当時)の青少年対策本部へ移って「青少年白書」を書いたころでした。情報を素材として白書を書くこと、「これは楽しい仕事だ」と思いました。子どもが生まれる直前に書き上げたのですが、そのとき、もう一回来年も書きたいな、という思いが湧きおこりました。同じチームの中に、私に才能があると見込んでくれた人がいたのも大きな助けになりました。また、本当につまらないことですが、お腹の大きいときに、「がんばれよ」なんて言ってくれる上司の方もいてくださいました。もちろん「なんで辞めないの」と言う人もいましたので、「敵1000人、味方1000人」でしたが、温かい言葉は心の支えでしたね。

拡大家族~「もう1人のお母さん」

当時女性の方はどの省庁にもわずかで、男性と同じように働いていたとか。

総理府(当時)では私の前に女性はいませんでしたし、「君に懲りたので、その後8年間採用していない」なんて冗談でよく言われました。上級職の場合には初級で入った人たちに比べて優遇されていたので、男の人と同じように働けないのであれば、お引取りくださいというのが当たり前の考え方でした。優遇されているからこそ、男の人たちに劣らない働きをして応えなければならないというプレッシャーがありました。

それが人を強くするのかもしれないですね。

自分で子どもを保育所へお迎えに行くことも当然できませんでした。ですから自分が早く帰るかわりに、近所の方にお迎えに行ってもらって、私が帰るまで面倒を見てもらう態勢を作りました。それでも、誰もお迎えにいけないときに、事情を察して自宅で面倒をみてくれた保育士さんもいました。この保育士さんはもう引退していらっしゃいますが、娘が小学校のときには運動会の応援に来てくれたり、結婚式にも来てくれて、今でも娘の「もう1人のお母さん」です。私が全部家

事を取り仕切っていたら、こういう風に家族が拡大することもなかったでしょうね。

「女王蜂シンドローム」

今、女性のワークスタイル、ライフスタイルもずいぶん多様化してきたために、女性同士の利害も一致しないこともあるかと思います。職場の中で古株の女性が新たに入る女性と敵対するような「女性の敵は女性」という事例もあるようです。

1980年から1981年にハーバード大学で女性管理職を対象に調査を行ったことがありますが、今の日本で言われていることと全く同じことが言われていました。「女王蜂シンドローム（queen bee syndrome）」などがその典型です。男性ばかりの職場の中で唯一の女性であるという状況に慣れてしまった女性が、他に女性が入ってくるのを嫌がって排除するという傾向が見られたのです。それが26年を経て、日本で同じような状況が見られるというのは興味深いことですね。

女性の社会進出の発展段階が当時のアメリカと同じ段階に来たということでしょうか。

アメリカの場合には男女雇用機会均等法（日本では1985年に成立）に相当するのは1964年の市民権法です。それから10数年後の1980年、こんな不適応な例があるということで面白おかしく女王蜂シンドロームと命名されたのでしょう。その他にも「建前女性管理職（token lady）」と呼ばれる事例もありました。地下鉄に乗るときのチケット（token）と同様に「わが社にも一応女性管理職がいますよ」というアリバイ証明として登用された女性のことを指しているのですが、そういう人にかぎって、私は実力があるからこそ登用されたと宣伝したがる傾向にあるという話です。

ところが2年前に行って話をすると、今はすっかり肩の力が抜けている。女性のライフスタイルにもバリエーションがあり、それが自然な形で共存している。女性の層が厚くなったことによって、社会の許容度が増しました。職場や社会で「女性」としてではなく、「個人」として評価されることが多くなって、とても楽になってきています。

これは日本にとっても希望の持てる観測ですね。

一方、希望の持てない観測もあります。アメリカでは格差社会が進んでいます。女性管理職で成功している人は大抵高給取りで、家政婦さんやベビーシッターを雇うことができるので、もう両立に苦しむことも少なくなりました。26年前には、「働く女性たちは、家事も育児もみんな自分でやらなくてはいけないのよね」と日本とアメリカの働く女性たちは互いに励ましあえたものでした。今やアメリカの女性管理職の方々は口をそろえて「家政婦さんがいれば、女性も男性に対して全くハンデなく働ける」と言います。アメリカでは新しい移民が増加していることもあり、家政婦という仕事も一般的です。しかし、格差が家族のあり方にまで影響を与えていることは印象的でした。

アナザーワールドの知恵

この他にも1981年のアメリカの状況には、現在の日本に対して参考になる話がいくつもあります。当時、女性が仕事をする上で必要なものが3つあると言われていました。ネットワーク、ロール・モデル、メンターです。メンターとは、男性の場合も女性の場合もありますが、助言者であるとともに、脆弱な女性の立場を守ってくれる有力者や擁護する人のことです。今これらがようやく日本で普及するようになりました。1981年に私は『米国きゃりあ・うーまん事情』という本の中でこの3つを紹介しておりましたが、そのころの日本ではまだ「アナザーワールド（別世界）」の話として受け止められていましたね。

当時私には5歳の娘がいたのですが、アメリカの女性管理職の方から個人的にも数々の知恵を頂きました。例えば「1人の女性が一生働いていくためには『ギア・チェンジ』が鍵。いつもギアをトップに入れていたら続かない。ときにはローにしたり、サードにしたりと、たまには力を抜いて乗り切らないとだめよ」とか、「ジェット機と同じで『テイク・オフ』をするまでが一番浮揚力が必要。テイク・オフのときには、どんなに大変でも頑張らなくてはいけない。でも、ある程度の高度に達したら巡航速度に入るから、無理にがんばらなくても大丈夫になるわ」といった話など、非常に多くのことを学んだ調査でした。

早速明日から使えそうな知恵ですね。

25歳から35歳までの間は子どもも小さく、自分自身も確立していないがために、「いつまでつづくぬかるみぞ」という気持ちになるのですが、そういうときこそ長期的な展望を持つと心のバランスがとれるのではないでしょうか。子どもは必ず大きくなります。子どもが小さいときに「一旦いさぎよく退職し、その後復帰して、男の人と同じように働くわ」というように辞めてしまうよりも、たとえローギアでもいいから続けていくということも大事かもしれません。そのときの苦労が花開くこともある。そういう知恵をぜひとも今の若い人に伝えたいと思いますよね。

▶坂東先生ってこんな人

得意料理･･･ 筑前煮
座右の銘･･･「志あるもの、こと意に遂ぐ」
好きな本･･･「古今集」や「万葉集」
好きな花･･･ ひまわり！　8月生まれだから
好きな映画･･･ 最近見て面白かったのは、「ブリジット･ジョーンズの日記」かな？
1日休みがあったら？･･･ ゴロゴロしながら、仕事に関係ない本を読む

男性の内なる「女性の品格」

『女性の品格』を読んで印象的だったのは、「出世欲、権力・拝金志向」に対峙する価値観として「女性の品格」に光を当てたことでした。現在育児や家事をこなしながら仕事をする男性が増えています。こうした男性にも「女性の品格」的なものが備わりつつあるということでしょうか。男性の内なる女性性が育まれることで、社会が変わるということもありそうですね。

そのとおりですね。（そうした男性は）まだマイノリティかもしれませんが、内面に色々なものを蓄積されていることと思います。「目にはさやかに見えねども」そういう方が少しずつ増えていくことで、新しい日本の男性像が生まれると思います。

先日NHKとともにノルウェーへ行き、男女平等大臣にインタビューしました。そのとき、保育所を訪れる機会があったのですが、驚いたことにお迎えに来る人のほとんどが男性だったのです。今、ノルウェーでは男性が保育園にお迎えに行けることを一種のステータスとしてとらえているんですね。子どものお迎えに限らず、育児や家事を楽しむためには、自由裁量のある仕事、つまり、プロフェッショナルな仕事についていることが前提となります。プロフェッショナルな仕事につきながら、育児を楽しむ姿を「かっこいい」と受け止める風潮が出てきたようなのです。

こうした状況の背景には男性の育児参加を促す制度があります。ノルウェーでは世界に先駆けて1993年に、男性の育児休業取得を促すための「パパ・クォータ（papa quota = パパ割り当て）制」を導入しています。この制度では、育児休業が54週間（賃金8割保障）または44週（同10割保証）になっていますが、そのうち6週間は父親に割り当てられます。その分を母親に譲り渡すことはできません。これによって、男性の育児休業の取得率が90%（2007年度現在）になったということです。

少子化対策のこれから・・・

当財団の職場にも育児中のパパ・ママがいて、少子化対策には大きな関心を寄せておりますが、坂東先生はどのような少子化対策が効果的だと考えられますか。

育児保険があるとよいと思っております。仕組みとしては介護保険と同じです。介護保険は40歳から加入して、介護が必要になったときに、1割負担で介護サービスが受けられ、残り9割については保険がカバーしている。加入対象者を20歳からに拡大して、育児のサービスが必要になったときには、就業の有無を問わず、育児サービスを1割負担で受けられるようにし、育児手当などは廃止する。お金ではなく、サービスを提供するということです。介護保険の導入によって、NPO（非営利組織）や株式会社など様々な主体がサービスを提供するようになりました。現在育児の分野でもサービスの供給が圧倒的に少ないので、これを導入することによって多様な主体が参入する機会になればよいと思います。

国際交流：ネットワーク形成の「触媒」に

ブリスベンでは総領事として日豪理解・交流に多大な貢献をされました。先生ご自身の国際交流活動では、どんなときに女性ならではの視点が活かされたのでしょうか。

公邸で行事を行うにしても、総領事館だけでは人数も少なく非力ですから、現地の方々の協力は不可欠です。ブリスベンでは現地の働く女性たちが私に興味や関心を示してくれました。そういう方とは「招待したら、招待してくださる」というやりとりもあり、ずいぶんと支えてもらったものです。私の自慢は、この方々が「マリコ・フレンズ（Mariko's Friends）」というネットワークを作ってくれて、それが今でもあることです。働く女性同士であっても、「きっかけ」がなければお互いに出会う機会がありません。ブリスベンは200万人程度の都市ですが、その町で私が女性同士のネットワーク形成の「触媒」になれたというのです。

一方、こうしたネットワーク形成においては、自分の言葉で日本のことをしっかり語れることが重要です。その点では、私は日本の家族の問題、女性の問題について語るものを持っていたことが役立ちました。語るものを持っていれば、たとえ英語が拙くても、聞いてくださる。一方的に「教えて」もらうのではなく、「私のところはこうだけれど、あなたのところはどう?」というように、情報の「ギブ・アンド・テイク（give and take）」ができることが交流にとっては大事なのです。ただ仲良くなるのではなく、自分が伝えたい明確なメッセージを持つということを忘れてはなりません。

▲▼色とりどりの花で彩られている昭和女子大学キャンパス

▶プロフィール

坂東眞理子（ばんどう　まりこ）
昭和女子大学学長。富山県生まれ。1969年東京大学卒業後、総理府に入府。その後、埼玉県副知事、在オーストリア連邦ブリスベン日本国総領事、内閣府男女共同参画局長などを歴任し、2007年4月より現職。現代社会における女性の生き方に鋭い意見述べ、男女共同参画からはじまる地域づくりなどに精力的に取り組む。著書に『米国きゃりあうーまん事情』（東洋経済新報社）、『新・家族の時代』（中央公論社）、『副知事日記』（国立印刷局）、『男女共同参画社会へ』（勁草書房）、『女性の品格』（PHP研究所）ほか多数。昭和女子大学ホームページ:
http://www.swu.ac.jp/swu.php

▶インタビューを終えて

坂東先生は聞いている人を魅了するビロードのような声の持ち主。低く落ち着いた口調で一つ一つ質問にお答えになられていたかと思うと、「そういえば、私が仕事を続けられたのは、もう一つ、ネガティブな理由もあったのよ」と急に切り出し、「私は家のことが下手なのよ。私が専業主婦になったら、世のため、人のためにならない、一番迷惑するのは夫と子どもだろうと思ったの（笑）」と真顔でさらりとおっしゃるお茶目な一面もお持ちです。そんな軽やかで柔らかな物腰にこそ、人生への自信が現れるのだと、実感したインタビューでした。

（インタビュアー　原嶋千榛）

かながわのキーパーソン

ラオス難民として来日28年

新岡史浩さん　在日本ラオス協会会長、第5期外国籍県民かながわ会議委員

にいおか・ふみひろ
旧名はレック・シンカムタンさん。ラオス出身。海老名市在住。現在インドシナ難民定住相談窓口相談員、秦野市の外国人児童生徒教育指導協力者（ラオス語、タイ語）なども務める。

在日ラオス人とともに生きる

自分の今までの生活や在日ラオス人のために現在行っている活動について気さくに話してくれた。明るく笑いながら語る新岡さんは来日して28年になる。

ラオスの政権交代で思想の取締りが厳しくなり、出国を決意したのは1979年のことだった(*注)。「勤め先で、(政治教育と称して)職員が一人ずついなくなっていった。いつ自分が連れて行かれるか分からなくて、そのときはとても怖かった」。このままでは将来は見えないと思い、家族と相談して先に新岡さんが出国することにした。

出国の方法は「メコン川を泳いで渡った」。「出国は計画的に行わないと撃たれたり、強盗にあったりしてしまう。雨季で川の流れが速く、夜の警備が薄いときを見計らって、空のポリタンクを抱えて約1kmを泳いだ」。隣国タイの難民キャンプに入ったのは7月。そこで日本へ難民申請した。その後申請が許可され、12月に家族とともに兵庫県の姫路定住促進センターへ入った。

同センターで日本語教育を受け、翌年の4月に神奈川県綾瀬市にあるボイラーの組み立て工場に就職した。以来、14年間4ヶ所の工場で働いた。その後は通訳などの仕事をしながら、ラオス人やインドシナ難民の相談を受けている。

在日本ラオス協会は2003年に愛甲郡愛川町に在日本ラオス文化センターを設立し、在日ラオス人の相互扶助、情報交換、交流の場として活用している。そこでは、毎年僧侶をラオスから招き、季節ごとの文化行事や結婚・出産のお祝い、葬儀の儀式などを行っている。また、在日ラオス人のためだけではなく、日本人を行事に招待し、地域とも積極的に交流している。

インドシナ難民として来日してきた人たちには、言葉や生活習慣の違いから就職や教育などで様々な問題を抱えている人も多い。また、日本語の方が得意な子どもとのコミュニケーションのギャップなどの家庭内の問題もある。その人たちのために、新岡さんは毎週水曜日厚木市でインドシナ難民の定住相談窓口で相談を受けている。その他にも、秦野市で外国人児童のための教育指導協力者としても活躍している。

日中は働いているため、相談に来るのは早くても7時を過ぎる。毎日夜遅くまで相談の対応をする新岡さんの献身的な姿勢が印象的だった。「困って頼ってくる同郷の人を見捨てることはできません。私が相談に乗らないとその人はどうしますか。他に誰も頼る人がいないんです」。笑顔を作ると目じりに深い皺が刻まれた。

*注　1975年にインドシナ3国（ベトナム、ラオス、カンボジア）では政権が社会主義体制に移行し、新しい体制の下で迫害を受けるおそれのある人や新体制になじめない人が数多く難民として国外に逃れた。そのインドシナ難民と呼ばれる人たちの総数は約144万人と言われている。財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部ホームページより。

投稿

矢崎英之さん（旧神奈川県国際交流協会設立当初から30年間会員をご継続）

国際交流のすすめ

生き甲斐とか充実した人生とは何かということを考えると、それはお金で買えない財産をいかにしてたくさん貯めるかということではないかと思う。それを「心の財産」と呼ぶとすれば、旅行に出かけ大自然の景観に接した時の感動、音楽会で素晴らしいコンサートを聴いたときの満足感は、どれも旅行費用や入場券代をはるかに超え金額では計り知れない心の財産である。

心の財産を増やす手段としては旅行や音楽や絵画の鑑賞、スポーツなど多岐にわたるが、その中でも国際交流という分野が心の財産を増やす効率的な手段だと思う。今の日本では外国からの留学生、居住者や旅行者と接する機会がたくさんあるし、手軽に海外旅行に出かける機会も多くなっている。このような環境を有効利用して、積極的に外国人に話しかけ交流を深め異文化の知識を吸収するとともに、ギブ・アンド・テイクの精神で自文化の紹介にも努めたい。

その場合大切なことは外国人とは本音で話し合うということだが、周りの国際環境や価値観も違うわけだから相手の立場をよく理解する国際感覚を身につける必要があろう。といって丸く治めようという気が働いて欲求不満の国際交流になってしまってはいけない。そういう意味では国際親善ということは、あまり考えないほうがいいだろう。そして時にはホームステイを受け入れたりしながら国際交流を深めることができれば、多くの新しい知識や思いがけない感動が得られ素晴らしい心の財産を手にすることができる。

国際交流はまさに生き甲斐という資産を増やす宝庫であり万人に勧めたい。

読者のみなさまからの投稿を募集しています。
原稿（800字程度）をFAXかメールで情報紙編集係までお送りください。紙面の都合で編集する場合、掲載できないこともあります。予めご了承ください。

KIF Report 財団が行う様々な事業を報告します

8月26日　あーす ぷらざ

フォーラム「日本語学習支援の現状と課題」

財団ではボランティア教室など、日本語学習を支える様々な機関の活動実態を把握し、行政や企業セクターを加えた日本語学習支援の新しいあり方を探る目的で、今年から2ヵ年で関係機関への調査事業を実施する予定です。

今回のフォーラムでは、長野県国際交流推進協会の春原直美さんから、日本語学習リソースセンターの立ち上げや、企業とボランティアの事業連携モデルの構築等を行ってきた長野県での事例を紹介していただきました。また、かながわ難民定住援助協会の櫻井ひろ子さん、ユッカの会の中和子さんから、神奈川県の事例を紹介していただきました。それらを踏まえて、慶應義塾大学の平高史也さんが現状と課題のまとめ、今後の可能性について話されました。当日の約50名の参加者は日本語ボランティア等日本語学習支援に関わっている方が多く、様々な質問・意見が寄せられました。

8月25日～10月8日　あーす ぷらざ

A DAY IN THE LIFE OF AFRICA 100人の写真家がみたアフリカの一日展

写真をご覧になった方からは、「1日を定め100人の写真家がアフリカを撮るという設定に面白さを感じました」「アフリカの明るい面も多く写されていた。しかし、私が行ったアフリカはもっと貧困の激しい面が多かった。どちらもアフリカの本当の姿であると感じた」などの声をお寄せいただきました。アフリカ大陸で起きていることは、日本にいるととても遠い出来事のように感じてしまいます。紛争・貧困・HIVなどさまざま問題に直面している彼らは、私たちと同じように愛する家族、友人がいるということ、同じ地球に生きる人間として、私たちにできることを考えるきっかけになればと願い開催した展覧会でした。41日間の開催で3,778名の方にご覧いただきました。

企画展の様子

関連イベントの様子

9月3日～7日　湘南国際村センター

国連大学グローバルセミナー　第23回湘南セッション「新たなグローバル秩序の担い手たち」

国連大学グローバル・セミナーは、現代社会が直面する地球規模の問題と国連の取り組みについての意識を高めることを目的として開催されています。第23回湘南セッションでは、研究・実務の先端で活躍しているゲストによる講演と参加者のグループワークが行われました。新たなグローバル秩序を考えるにあたり、軍事をはじめとする政治的な秩序、人権・人道秩序、環境・開発秩序の各分野における現状を理解するとともに、多様化した担い手とその中での国連の役割について考える場にすることを主なねらいとしました。

カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校リチャード・フォーク客員教授による基調講演「新たなグローバル秩序の担い手たち」をはじめとする8つの講義に加え、独自企画である「かながわセッション」では、神奈川をはじめとする日本国内の「内なる国際問題」を取り上げ、複合的・総合的に国際問題を捉える契機となりました。

今年も北は新潟県から南は熊本県まで、日本各地から留学生22名を含む総勢97名が参加しました。さらに、海外からの講師が2名、国内からの講師が6名、グループ討論アドバイザーの講師陣13名が揃って4泊5日間の寝食をともにする中で、一層交流が深まりました。

セミナーの様子

Yes,Noに分かれて活発に行われた全体討論

Event Schedule

イベント　すけじゅーる

10月1日（月）～11月30日（金）

かながわ民際協力基金　申請募集中

■対象分野：
次の①～⑥のいずれかに該当する活動で、2008年4月1日以降、1年以内に開始される事業
※⑤、⑥については、実施時期・申請受付時期は問わず、随時受け付けます。
①海外の開発途上地域での協力活動
②外国籍県民等を対象とした、県内での協力活動
③国際協力の担い手を育成する活動
④NGOの組織強化や活動の充実をはかるための活動
⑤国内外の大規模な災害などに対応して行う緊急支援活動
⑥NGOとかながわ国際交流財団が協働で行う活動
■申請資格：神奈川県内に活動拠点があるか、主に県内で活動するNGO
■助成上限：①～③300万円　④50万円
（⑤は申請内容により決定、⑥は100万円を上限とする経費負担）
■申請受付期間：2007年10月1日（月）～11月30日（金）
1）詳しい内容はこちらでご覧ください
かながわ民際協力基金　http://www.k-i-a.or.jp/fund/fund01.html
かながわ民際協力基金「協働事業」　http://www.k-i-a.or.jp/fund/fund03.html
2）ご相談はお気軽に
申請してみようかな?とお考えのNGOの方、お気軽にご相談ください。メール、お電話、直接お会いしてのご相談もできます。申請締め切り前は、ご相談が集中します。できるだけ早めの時期のご相談をお勧めします。
■問合せ：国際協力課（担当:成田）
TEL：045-896-2964（祝日除く月曜休み）
FAX：045-896-2945　　E-mail:minsai@k-i-a.or.jp

11月28日（水）

世界の文化セミナー　タイ料理講座

調理・試食を通して食文化を知り、タイという国にふれてみませんか。グリーンカレー等タイの代表的な料理を作る他、タイでも人気上昇中のイーサン地方の料理、納豆などの日本食材を活用したタイ料理の作り方も紹介します。
■日時：2007年11月14日、21日、28日
全3回　水曜日　10:00～14:00
■場所：あーるぴぷらざ1階　料理室
■参加費：10,500円（財団会員は9,450円）
■講師：アロム・ホムスワンさん
タイ出身、現在横浜市中区在住、タイ食材店J'sストア店主。来日14年。趣味でタイの食文化について研究を重ね、各地で紹介事業に参加している。タイ語講師としても活躍。
■メニュー（予定）
第1回
青いパパイヤのサラダ、白身魚のタイ風薩摩揚げ、タイ風やきそば
第2回
グリーンカレー、空心菜等の炒め物、ココナッツミルクのデザート
第3回
新鮮野菜の"納豆"ディップ、トムヤンクン、クワイのデザート
■申込み・問合せ
国際協力課（担当:富本）
TEL：045-896-2964（祝日除く月曜休み）
FAX：045-896-2945
E-mail：minsai@k-i-a.or.jp（件名「料理講座」）

11月16日（金）

かながわの国際化を考えるシンポジウム

神奈川開港・開国150周年メモリアルイベント
かながわ国際交流財団発足記念

総監修：鈴木佑司（法政大学教授）
基調講演：
ジョセフ・R・ドノバン（駐日米国大使館首席公使）
「The U.S. View of the Globalizing World」
坂東眞理子（『女性の品格』著者、昭和女子大学学長）
「女性の品格と国際交流」
討議者：
小貫大輔（東海大学准教授）
金栄作（韓国・国民大学名誉教授）
宮島喬（法政大学大学院教授）
山中悦子（NGOかながわ国際協力会議委員長）
葉鳳英（外国籍県民かながわ会議委員長）
■日時：11月16日（金）13:00～17:00
■場所：あーるぴぷらざ1階　プラザホール　　■参加費：無料
■問合せ：湘南国際村学術研究センター（担当：広崎・玉井）
TEL：046-855-1822
■申込み：FAXかE-mailでお申込みください
FAX：046-858-1210　　E-mail：shonan@k-i-a.or.jp

11月28日（水）

湘南国際村アカデミア

目で見る染色体のヒミツ ～ゲノム動態研究の最前線～

「ガン細胞には小さな染色体があります。その増殖の仕組みを公開!」
「染色体の分配の見張り番、その名も『シュゴシン』のお話」
「生活習慣病と染色体の切っても切れない関係とは?」
そのほか、日本を代表する最先端の研究者たちが生命の神秘の世界についてわかりやすく紹介します。
■日　時：11月28日（水）13時40分～17時
■場　所：総合研究大学院大学講堂
■参加費：無料
■講　師：田辺秀之（総合研究大学院大学准教授）
ほか5名
■定　員：100人
■申込み：11月16日（金）までに、はがき、FAXまたはEメールで住所、氏名、電話番号を下記まで。
■問合せ：湘南国際村学術研究センター（担当：玉井、広崎）
TEL：046-855-1822
FAX：046-858-1210
E-mail：shonan@k-i-a.or.jp

かながわ民際協力基金　2007年春助成決定事業

助成事業	第81号「ソロモン諸島沖地震復興支援事業」	第82号「多言語による教育生活相談事業および多言語相談活動に関わるスタッフ研修事業（2）」
団　　体	（特活）APSD	（特活）在日外国人教育生活相談センター・信愛塾
事業分野	緊急支援	国内協力
助 成 額	2,860,000円	1,959,000円
事業概要	ソロモン諸島沖地震の被災地域であるウェスタン州において、食料自給体制の再構築を目指したワークショップを地域住民対象に実施し、震災後の復興を支援する。	急激に増加している日本語理解が不十分な外国人が、母語により教育や生活に関する相談を受けることができるような体制を築く。同時に言語補助スタッフ・母語相談員育成のための研修の定期開催などにより継続的に多言語による教育生活相談事業が可能となるような体制を築く。

★2007年秋申請募集中!詳しくは11P★

アジアフェスティバルin大船 つながる　ひろがる　アジアの　ねがい　ゆめ観音

「ゆめ観音・アジアフェスティバルin大船」が今年も9月8日に大船観音寺で開催されました。日本で暮らすアジアの人々とともに平和を祈り、各国の民族舞踊や伝統芸能を奉納する催しです。観音信仰の下に様々な文化を持つ在日のアジアの人々をつなぐことを目的に、毎年秋に開催され、今年で9回目を迎えました。観音信仰は宗教や民族を越え、アジアの人々が持つ信仰であり、在日アジアの人々が悩みや思いを胸に参拝に訪れています。その在日アジアの人々が集い、祈りを捧げ、また音楽や舞踊で楽しい時間を過ごしてもらうため、開かれています。

また、世界の恒久平和の祈願も込めて建立された大船観音の寺境内には、広島の原爆の火が燈されており、その平和への願いもこのイベントには込められています。

実行副委員長の亀野哲也さんは、「様々な人がイベントの趣旨に賛同してくれて、自分のスタイルで参加してくれています。宗教性を排除したり、特定の宗教に偏ったりすることなく、色々な宗教、民族が混ざり合い、それぞれの祈りを捧げられることがこのイベントの特徴です。（言葉によるものだけではなく、）平和の実践的なメッセージを出していければ」と語ってくれました。

実行副委員長の亀野哲也さん

ゆめ観音でいただいた義捐金の一部は、毎年かながわ民際協力基金に寄付をいただいています。

●かながわ国際交流財団は・・・

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人のつながりを大切にした国際交流・国際協力、地球市民意識の高揚と多文化共生社会の実現、国際的な人材の育成、学術・文化交流並びに情報発信などの様々な事業を展開しています。

●会員になりませんか?

財団の活動を支える会員を募集しています。会員になると…

- 財団が主催する各種催しを掲載した情報紙をお送りします。
- 当財団の出版物の割引サービスが受けられます。
- 会員の方を対象にした催しへご招待します。
- 会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

など

＊会員登録をご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。振り込み用紙など関係資料をお送りします。

★当財団は、2006年4月より、神奈川県から指定管理者の指定を受け、あーすぷらざを運営することになりました。
★このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川国際学生会館を運営しています。

JR根岸線「本郷台」駅改札出て左すぐ

バスでお越しの場合
JR横須賀線「逗子」駅前1番乗り場より、16または26系統「湘南国際村」行きバスに乗車、「湘南国際村センター前」下車。所要時間約25分　料金340円

かながわ国際交流財団ニュースレター
2007年11月1日発行　第4号
発行／財団法人かながわ国際交流財団（本部）
〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1　あーすぷらざ1F
TEL：045-896-2626
FAX：045-896-2945
URL：http://www.k-i-a.or.jp
E-mail：minsai@k-i-a.or.jp
印刷／文明堂印刷株式会社

広告を掲載しませんか？
各ページに広告を掲載するスペースを設けています。県内で国際協力・国際交流の活動を展開している市民活動グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県立高校、市町村国際担当部署、市町村教育委員会、市町村区役所、県庁、会員などに配布しています。発行部数は6,000部です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

編集後記

『長江哀歌』という映画を観てきました。淡々としながらも、そこに生きる人々の活力に満ちた姿を実に見事に描き出していました。長江の三峡ダムの水に沈む町や村で取り壊される建物。国家の一大プロジェクトに振り回される住民。しかし、その中で歌を歌い、酒を飲み、麻雀を楽しみ、そこに暮らす人々の「生」がある。急激な経済発展は多くのものをもたらす。金を持ち、携帯を持ち、物心両面に変化が生じる。その変化にあっても「変わらないもの」を中国の人は求めているのかもしれません。（も）

＊情報紙に掲載されているイベントへのお申込みの際にお知らせいただいた個人情報は、イベント受付以外の目的には使用いたしません。